研究班報告 1　Community Studies Group

ゼミ活動から考えるもの

中村昭雄

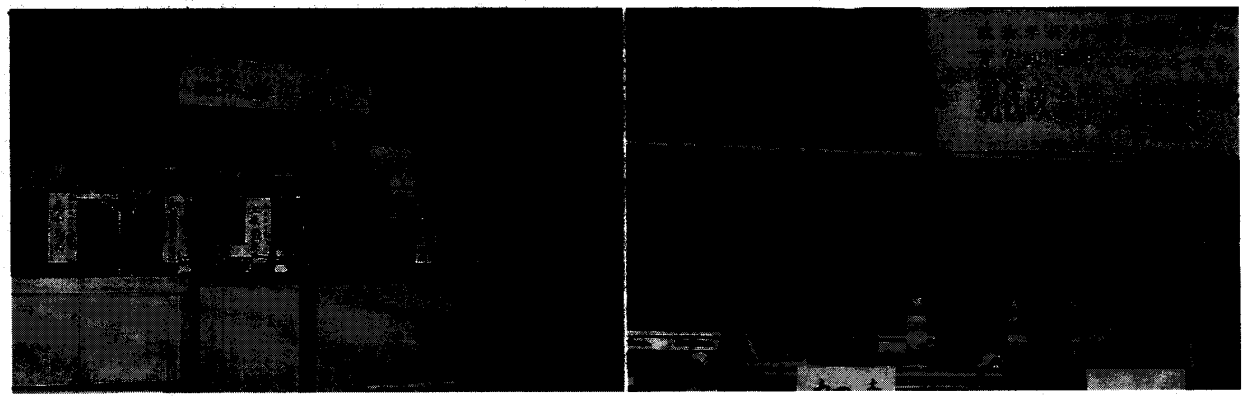
1.「先生、どうやって学生を動員するんですか？」こういった質問は昨年学園祭でゼミ発表をしている最中に、そして学園祭が終わってからも同僚も含めて何人かの方から尋ねられた。今回、国際比較政治研究所のニューズ・レターに学園祭でのゼミ発表について執筆を依頼されたのも、定かではないが多少その延長線上にあるのかも知れない。本稿では学園祭でのゼミ発表を通して考えたもの、感じたものについて思いつくまま書いてみる。(注：昨年の学園祭で中村ゼミの3年生は、キャンパスに隣接する高島平団地を対象に少子高齢化の実態を半年かけて調査し、それらを『高島平団地の未来～少子高齢化のゆくえ～』と題する226頁の本にまとめ、それをテーマにして学園祭で発表した。歴史を調べ、データを分析し、団地に暮らす議員、地域新聞の編集長、小学校の校長、老人クラブの役員など住民へのインタビューやアンケートを行い、最後にゼミ生一人一人が「自分に何が出来るか」という提言をした。)

「動員」という言葉は、どうも私の趣味にあわない言葉である。そして何よりも私には動員したという意識がないし、ゼミ生も恐らく動員させられたという意識はないと思うからである。強いて言うならば、「教学相長」の気持ちであろうか。今時の大学生を、もしもちょうど幼稚園の先生が園児に言うことを聞かせるように動かせるのなら羨ましい限りである。もっとも、最近では幼稚園でも「学級崩壊」という現象が起こっているらしいから、「先生の言うことに耳をかさない」といった行動には、先生という職業に就いている人が、等しく関心を持っていることなのかも知れない。

2. さて、以下ではゼミ発表の経過、方法論、あるいはゼミ発表の意義（目的）等について書いてみる。

私は前任校でも何度か大学祭でゼミ発表を行なってきた。その時の動機は、授業の延長のようなゼミでは私が学生に伝えたいこと、学生に学んで欲しいことなどが、学生に伝わらないと感じたからである。もちろん教室内の学問も大切だが、教室外のフイールドワークを取り入れ、体で実社会を学んで欲しかったのだ。(注：94年には『戦後50年　証言でつづる50年前の太田』の本を作成し発表。95年には『女性と太平洋戦争』の本を作成し発表。)

こういった経験をもって2年前に大東大に赴任した時、私はゼミの1期生に対して、「私は前任校で学園祭の時にゼミ発表をしてきましたが、諸君はどうしますか？」と聞いてみた。その答えは「是非やってみたい」ということであった。私にとっては予想外のそしてうれしい返事であった。私は前任校でも3期生になってからようやく本格的なゼミ発表が出来たので驚きと不安もあった。後で分かったことだが、大東大でもあまりゼミ発表が盛んでないと聞いて二重の驚きであった。



第7回シンポジウム（平成11年12月9日開催）

その意味で、1期生のパイオニア精神には敬服するのである。(注：1期生は98年『サッカーくじの政治力学』の本を作成し、学園祭でゼミ発表をした。)

私たちのゼミ発表では、ゼミ生たちが調べまとめたものを、最終的には本の形で著わそうというものであった。われわれの場合でもそうであるが、本が出来上がったときの感動は格別なものがある。その感動を学生諸君にも在学中に味わって欲しかったのである。(これは私の個人的な願望である。) 中村ゼミでは在学中に2回本を著わすチャンスがある。1回目は3年次におけるゼミ発表で、これは全員による共同作業である。2回目は4年次におけるゼミ論で、これは個々人の作業によるものである。私としては4年次が本番で、3年次はリハーサルと考えている。

さて昨年の2期生は、いろんな意味で1期生の様子を見てこのゼミに入ってきているので、学園祭で発表することも心得ていたようである。というよりもむしろ、学園祭でそういう発表をしてみたいという学生が集まったような気がする。5月の新歓合宿ではすでに学園祭でのゼミ発表が話題に上っていたようである。最初の関門は研究テーマの決定である。この時に私の方から「これこれのテーマで研究しなさい」という方法をとったら、こういった共同作業は失敗するような気がする。たとえ私の方に強い関心、あるいは強い確信があったとしても、である。

今回の場合は全員にテーマを出してもらい、「時事問題」グループと「地域密着型」グループに分かれテーマのコンペを行い、それぞれお互いに質疑応答を繰り返し、最終的にゼミ生はテーマを大学に最も身近な「高島平団地」に決定し、決定したら今度は全員がこのテーマで研究を進めていくのである。次に、それでは高島平団地の何について研究するのかという検討に入った。これもゼミ生全員に各自の興味関心のあることを発表してもらい、いつものように熱い討論を繰り返した。6月、7月と2ヵ月位この検討に時間を費やした。こんな時にも私の方から「これこれの内容で研究しなさい」という方法をとったら、やはり共同作業は失敗するような気がする。ゼミに入ってまだ2～3ヵ月で、しかもいろんな考えを持っている学生が集まり、熱い議論を戦わせているのである。意見の一致を見るまで時間がかかるのである。ここは「じっと我慢である」。

こういったプロセスで、研究テーマを決定する時、研究内容を決定する時、適切なアドバイスを与えることが重要で、時には「行政指導」さえ必要な時もある。時には行司の役をしなければならない時もある。こういった時に判断を間違えば、学生から信頼を失うだけである。

8月の夏合宿でゼミ発表の概要を聞いたが、どうもゼミ生の共通理解が出来ていないという状態であった。スタートの早さから言えば、多少の焦りと不安を感じたのである。しかしここでも「じっと我慢である」。ここで「こうだ」と言うことは簡単であるが、やはり忍耐である。ゼミ生を信頼するしかないのである。

ようやく何かが見えてきたのは9月の後期が始まる頃で、それから約1ヵ月間でまとめたのである。テーマを決め、資料を集め、まとめて原稿にし、パソコンで原稿を清書し、印刷する。ここまで全て学生の手によるもので、製本だけをお願いするのである。

3．方法論　研究方法はいろいろあるが、私のゼミでは何故か一貫してインタビューという手法を使っている。その理由として、本を読んでまとめるというやり方（コピーとノリとハサミ）には私もそして学生も「もうイイ」という感じなのである。もっともこのことは文献を読むという基本的な研究方法を否定するものではない。インタビューという手法から私たちは実に多くのことを学ぶのである。インタビューの相手は本ではなくその現実を生き抜いてきた生身の人間なのである。そこの重みである。学生はインタビューを通じて、研究に関する事実、知識だけでなく、人間というものをそこに学ぶのである。そこには実にさまざまな「出会い」があるのである。もし、私たちがただ文献を読みそれをうまくまとめて発表するという手法をとっていたとしたら、学生諸君がそこから学ぶものはそれ程多くはないのである。最近の学生には現実感覚（社会的感覚）が欠如している学生が多く見受けられる。その理由として、バーチャル・リアリティ（仮想現実）の世界にどっぷりと浸りきっていることが考えられる。そういった意味で、学生時代に現実の社会に飛び出しし、その社会を生き抜いてきた先輩の人と話

すことは、有意義なことだと思う。社会との関わりを忘れた学問は無味乾燥である。

4．私がゼミ発表を行なう目的（意義）は何かというと、彼らの人間としての成長である。学園祭で発表を終える頃には、3年生の一人一人が人間として一回りも二回りも大きく成長しているという理由からである。そしてそれぞれが自信を持つようになっているということである。どうしてそうなるかは、やはり「これだけの大変な作業を乗り越えた結果」としか言いようがないのである。半年で人間が変わるのである。だから私もこりずに毎年やるのだと思う。

学園祭の発表が間近になると学生も私も真剣になり、ピリピリしてくる。学生同士、あるいは学生と私との関係、いいところも悪いところも全てさらけ出すことになる。10人前後の学生が共同作業をするわけだから、何かが起こるのが当たり前だ。何も起こらない方が不思議だ。人間と人間との真剣なぶつかりあいである。しかし、最終的には全てを乗り越えている。やはり究極的には学生同士のそして学生と私の信頼関係である。そして信頼関係のないところでは何をやっても成功しないだろう。逆に信頼関係があればほとんどの難問はクリアーされるのである。

今、大学が、大学の教育が、大学の教員のモラルが、授業が、学生の学力が、学生の授業態度が、等々実に多くの大学に関する諸問題の改革が叫ばれている。そして、文部省はじめ各大学それぞれに改革に着手している。例えば、学部の名前を変えたり、カリキュラムを変えたりと。もちろんそういった努力も一方では大切なことであるが、最も基本的な学生と私たち教員との関係を忘れてはならない。釈迦に説法のようで恐縮だが、「教」という漢字は、教える者と学ぶ若い者とが共に交わるという意味らしい。

学生は本当は打ち込める何かを、ワクワクしたい何かを、熱中したい何かを探しているのである。もちろん学生が自ら探し出すことも大切なことであるが、そういうチャンスを作ることは、われわれ先に生まれたという意味での先生が行なう役割ではないだろうか。

研究班報告 2　Policy Studies Group

エレウテリアーとデーモクラテイアー

永井健晴

一 二分法と両義性 (Dichotomie und Äquivokation)

"L' homme est né libre, et partout il est dans les fers. Tel se croit le mâtre des autres, qui ne laisse pas d'être plus esclave qu'eux. Comment ce changement s' est-il fait? Je l' ignore. Qu' est-ce qui peut le rendre légitme? Je crois pouvoir résoudre cette question."

ジャン・ジャック＝ルソー『社会契約論』冒頭のこのパラグラフは、夙に人口に膾炙している。ホメーロスの叙事詩や古典期アテーナイのギリシア悲劇においては、語り起こしの一言が、しばしば全編を貫くライト・モティーフを凝縮して表現している。主著の一つを叙述するにあたって、古典に親炙していたルソーは、どの程度これを意識していたであろうか。いずれにしても、このパラグラフには、政治哲学の核心を成す事柄が、すなわち、自由、支配、正統（当）化の関連が、的確に表現されているように思われる。だが、その解釈は、一見してそう思われるほど容易ではない。用語にせよ、命題にせよ、コンテクストと立論全体から理解されないかぎり、恣意的な解釈は必至だからである。

まず、上に掲げたパラグラフの第一文に注目してみよう。既存の邦訳ではそこは、「人は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている。」（井上幸治訳）（A）あるいは「人間は自由なるものとして生まれた。しかもいたるところで鎖につながれている。」（桑原武夫他訳）（B）と訳されている。第一に、（A）訳では、動詞 naître の過去分詞 né が être libre を修飾する副詞と解され、前文全体が時制に係わらない一般命題とされている。これに対して（B）訳では、複合過去形 être né を、副詞 libre が修飾している。（もちろん être né は、